



はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大学工学部助教授を経て95年より同教授。著書に「言語ゲームと社会理論」「橋爪大三郎の社会学講義」など多数。

写真：房木茂雄

教育の責任と 主体性を社会へ戻せ

東京工業大学教授

橋爪大三郎氏 に聞く①

トップインタビュー

潮流

題字：奥野誠亮

中央教育審議会や教育課程審議会答申をはじめとして二十一世紀の教育の具体的方向性が見えてきた。しかし、教育改革の成り行きを見つめているのは教育界の人々だけではない。ユニークな大学改革論を展開する社会学者、橋爪大三郎・東京工業大学教授に話を聞いた。

一斉授業からの脱却

——今、進んでいる教育改革論議をどうご覧になりますか。先生も大学改革をはじめいろいろな提案をされていますね。

学区制をなくせとか入試をなくせとか制度の話もありますが、なぜ学校がこんなにも魅力がない、つまらない場所になってしまったのから考えなければいけない。それに、大学に入ってくるころにはみんなくたびれ果てていて、専門にも興味がわかない。学校を人間が生きやすい場所、役に立つ場所につくり直したいですね。ただ、大学入試のやり方さえかえれば、全部の問題が解決してしまうとはいかない面があります。というのは大学進学者が増えたとはいえ、同年代の人たちの四〇%とまりです。ですから、そうじゃない人たちにとっては小・中・高校が大事になるわけです。

——これまで、数多くの教育改革が行われていますが、いろいろな提案があつたけれども、うまくいかないのは、日本人が教育に対して全般的に誤解をしている面もあると思うんです。その最たるものはたぶん文部省の役割ということでしょう。文部省は確かにたいへん立派な仕事をしてきた。特に明治時代は初等中等教育を日本に普及させたことや大学をつくったことの功績は大きい。それは十分認めますがそのころの活動がうまく行き過ぎてしまったために文部省がないと教育が成り立たないという幻想を文部省も国民ももってしまったのではないのでしょうか。

当時、日本は立ち遅れた近代国家で、教育を急速に普



及させるために文部省を中心に国が首頭をとってきたのであって、本来近代国家がゆとり成熟していく場合には学校は自然に親や地域社会、産業社会の努力が必要に応じてできあがっていく。ですから、そろそろ教育の責任と主体性を文部省ではなく、普通の社会に戻したほうがいい時期にきていると思います。

教育改革っていうのは必ず文部省主導できているんですよ。今回の中教審でもその前の改革でも文部省が「問題がある」と言い始めて、案を考えて、実行する。そうすると問題はかえってひどくなる。その繰り返しなんです。文部省は文部省の殻を破れていない。中でもその基本になっているのが学習指導要領と検定教科書です。学習指導要領でだれに、何を、いつ教えるかを決め、検定教科書でコントロールする。教え方は国中一緒。どのクラスも一緒。もちろんいい面もあります。しかし、いまは悪い面が目立っています。人には個人差があるでしょう。理解の早い遅いもある。それを一緒にしたら早く行く子は退屈してしまう。ついていけない子にとってはこれほど辛いことはない。真ん中の子もおもしろくないです。ということ、だれにとっても不幸せなんです。この一斉授業という考え方が「落ちこぼれ」を生み、校内暴力や中途退学、いじめ、不登校を生む。突き詰めると、これは本人の責任ではなく学習指導要領、クラス一斉授業というシステムが生み出していると言っているのではないのでしょうか。この枠組みの中で改革しようとしてもうまくいきません。

——教課審は教育内容を削減するといっています。一緒に進行していたら、ついていけない子が多くなつたからゆとり歩こうと決めたいんです。それでも落ちこぼれは減ります。退屈する子も増えるでしょう。まず、現れるのが学力の低下です。ゆとりの教育を進めたらもう学力は低下する。ゆゆしいことです。そういう発想になるのはクラス一斉授業という枠が破れないから。そのようにする。そうすれば当然あるべき競争が生まれてきます。よりよい教育をすれば当然児童は集まり、教育の質が悪ければ、児童は減って最後は閉校。あるいは教師の交代ということになるかもしれない。これは資本主義の基本的なロジック。満足できるようなサービスをしなければだれもお金を払ってくれない。信頼してくれないわけです。今、そういう競争が働かないから、一律に評価され、悪いほうに合わせて「どうせ大したことないよ。公立学校なんか」と思われてしまっている。

——それは本来あるべき競争なのですか。

はい。でも、児童の側には競争はなくていい。だれが何番なんて小学生の時というのは愚かなこと。そのかわり、どこまで学習が身についたかは妥協なく評価したほうがいい。小学校で学ぶべき漢字はこれだというのであれば、小学生といえどもテストはする。そこで、合格点ももらえるように頑張るようにしたい。必要なら補習をし、逆に理解できる子は先に進めばいい。学校が自分に合わせてくれると思えば自分が主役ですね。

学習指導要領も教育委員会の指図もないとすれば、やはり決めるのは現場の先生です。ただ、コーディネートが必要ですね。そこで校長、教頭が学校全体をみて個々

ここで文部省は退場したほうがいい。クラス一斉授業という考え方はやめて、その代わり何を、いつ、どのように教えるかということにする。しかし、めちゃくちゃに教えることはできません。子どもとの対話の中で、子どもの発達に合った教え方、合理的な教え方というのが生き残っていくことになるでしょうね。その上で学力に関して国で決めた統一基準が欲しいのであれば、それを確認する試験をすればいいのです。

自動車の運転免許試験というのは国で決めた資格試験です。合格点をとれば学科は合格する。合格すれば同じ免許証でしょう。だから百点のほうは九十点より偉いと思わない。中・高校で勉強しないのに、ここで勉強するのは試験の存在理由が明確だからです。友達同士もみんなで助け合って勉強するのは資格試験は絶対評価だからです。隣の人が合格したから私が不合格になるという要素は皆無ですね。むしろ、互いに助け合ったほうがそろって合格できて気持ちいい。つまり、連帯が生まれるのです。

今は、競争があるべきところになって、競争がなくなっていくところにある。学校の成績評価は絶対評価がいい。しかし、専門職には競争が必要です。例えば、大工なら家をうまく建てる。医者なら知識がなくてはいけなくて、そのためには勉強しなくてはいけない。そんなことは子どもでもわかる理屈です。でもこれ以外の競争はなくていいのだから楽しく子ども時代を過ごせばいいんです。そのメリハリが大切です。

学区制廃止と校長の権限拡大を

——そうすると、小学校はどのように変えていけばよいのでしょうか。

小学校は平等を意識しすぎるあまり、親や子どもが学校を選べないし、学校のほうでも子どもを選べない。ここを変える。学区制をなくし、親と子どもが学校を選べる。この教科の進み具合を調整しなくてはならない。学校が最終的な責任をもつ。校長に権限を集中させてその代わり責任をもつことです。

ここでいちばん大事なのは、教委が各学校に教員を割り当てるのでなく、校長が採用するシステムにすることです。そうすると、校長の信頼に応えようと教員はがんばります。がんばらなければ校長にクビにされてしまうから。学校全体の質が落ちれば校長がやめさせられ、自分もやめさせられてしまう。つまり、教員と校長は一蓮托生だから協力せざるを得ない。職員室のバラバラな雰囲気も変わると思います。

校長に大きな権限はありますが同時に保護者に対して責任ももたなくてはなりません。教育に失敗すれば児童はほとんど転校してしまいます。で、最終的にまづいことが起きたり、教育目標が達成できない時はたぶん、学校理事会のようなPTAプラスアルファのような機関が校長を交代させる。校長は公募制でいいと思います。校長の間にも教員の間にも競争が働きます。よりよい条件で校長に雇われたいとか実績を重ねて校長になるうとか。一律に何年勤めたからいくらの給料ではなく、自分の能力を評価されていくことになる。

——それでは公務員ではなくなる?

最低限の保障はあつていいと思います。普通のビジネスマンではありませんし、すぐに他の職業に転職できるものでもありません。少し自分の教育力が落ちたなど自他共に感じたら大学に一年間研修にいったり、家庭が忙しくなったらパートタイムで働いて時期をみてまたフルタイムに戻るとか。勤務形態も校長が決めればいい。教委が一次的に教員を採用するのと違って学校数だけ校長がいるわけですから、履歴書をもって面接を受ければいい。実績をあげれば待遇もよくなっていく。中学校も大体同じロジックでいいと思います。

及させるために文部省を中心に国が首頭をとってきたのであって、本来近代国家がゆとり成熟していく場合には学校は自然に親や地域社会、産業社会の努力が必要に応じてできあがっていく。ですから、そろそろ教育の責任と主体性を文部省ではなく、普通の社会に戻したほうがいい時期にきていると思います。

教育改革っていうのは必ず文部省主導できているんですよ。今回の中教審でもその前の改革でも文部省が「問題がある」と言い始めて、案を考えて、実行する。そうすると問題はかえってひどくなる。その繰り返しなんです。文部省は文部省の殻を破れていない。中でもその基本になっているのが学習指導要領と検定教科書です。学習指導要領でだれに、何を、いつ教えるかを決め、検定教科書でコントロールする。教え方は国中一緒。どのクラスも一緒。もちろんいい面もあります。しかし、いまは悪い面が目立っています。人には個人差があるでしょう。理解の早い遅いもある。それを一緒にしたら早く行く子は退屈してしまう。ついていけない子にとってはこれほど辛いことはない。真ん中の子もおもしろくないです。ということ、だれにとっても不幸せなんです。この一斉授業という考え方が「落ちこぼれ」を生み、校内暴力や中途退学、いじめ、不登校を生む。突き詰めると、これは本人の責任ではなく学習指導要領、クラス一斉授業というシステムが生み出していると言っているのではないのでしょうか。この枠組みの中で改革しようとしてもうまくいきません。

——教課審は教育内容を削減するといっています。一緒に進行していたら、ついていけない子が多くなつたからゆとり歩こうと決めたいんです。それでも落ちこぼれは減ります。退屈する子も増えるでしょう。まず、現れるのが学力の低下です。ゆとりの教育を進めたらもう学力は低下する。ゆゆしいことです。そういう発想になるのはクラス一斉授業という枠が破れないから。そのようにする。そうすれば当然あるべき競争が生まれてきます。よりよい教育をすれば当然児童は集まり、教育の質が悪ければ、児童は減って最後は閉校。あるいは教師の交代ということになるかもしれない。これは資本主義の基本的なロジック。満足できるようなサービスをしなければだれもお金を払ってくれない。信頼してくれないわけです。今、そういう競争が働かないから、一律に評価され、悪いほうに合わせて「どうせ大したことないよ。公立学校なんか」と思われてしまっている。

——それは本来あるべき競争なのですか。

はい。でも、児童の側には競争はなくていい。だれが何番なんて小学生の時というのは愚かなこと。そのかわり、どこまで学習が身についたかは妥協なく評価したほうがいい。小学校で学ぶべき漢字はこれだというのであれば、小学生といえどもテストはする。そこで、合格点ももらえるように頑張るようにしたい。必要なら補習をし、逆に理解できる子は先に進めばいい。学校が自分に合わせてくれると思えば自分が主役ですね。

学習指導要領も教育委員会の指図もないとすれば、やはり決めるのは現場の先生です。ただ、コーディネートが必要ですね。そこで校長、教頭が学校全体をみて個々

ここで文部省は退場したほうがいい。クラス一斉授業という考え方はやめて、その代わり何を、いつ、どのように教えるかということにする。しかし、めちゃくちゃに教えることはできません。子どもとの対話の中で、子どもの発達に合った教え方、合理的な教え方というのが生き残っていくことになるでしょうね。その上で学力に関して国で決めた統一基準が欲しいのであれば、それを確認する試験をすればいいのです。

自動車の運転免許試験というのは国で決めた資格試験です。合格点をとれば学科は合格する。合格すれば同じ免許証でしょう。だから百点のほうは九十点より偉いと思わない。中・高校で勉強しないのに、ここで勉強するのは試験の存在理由が明確だからです。友達同士もみんなで助け合って勉強するのは資格試験は絶対評価だからです。隣の人が合格したから私が不合格になるという要素は皆無ですね。むしろ、互いに助け合ったほうがそろって合格できて気持ちいい。つまり、連帯が生まれるのです。

今は、競争があるべきところになって、競争がなくなっていくところにある。学校の成績評価は絶対評価がいい。しかし、専門職には競争が必要です。例えば、大工なら家をうまく建てる。医者なら知識がなくてはいけなくて、そのためには勉強しなくてはいけない。そんなことは子どもでもわかる理屈です。でもこれ以外の競争はなくていいのだから楽しく子ども時代を過ごせばいいんです。そのメリハリが大切です。

学区制廃止と校長の権限拡大を

——そうすると、小学校はどのように変えていけばよいのでしょうか。

小学校は平等を意識しすぎるあまり、親や子どもが学校を選べないし、学校のほうでも子どもを選べない。ここを変える。学区制をなくし、親と子どもが学校を選べる。この教科の進み具合を調整しなくてはならない。学校が最終的な責任をもつ。校長に権限を集中させてその代わり責任をもつことです。

ここでいちばん大事なのは、教委が各学校に教員を割り当てるのでなく、校長が採用するシステムにすることです。そうすると、校長の信頼に応えようと教員はがんばります。がんばらなければ校長にクビにされてしまうから。学校全体の質が落ちれば校長がやめさせられ、自分もやめさせられてしまう。つまり、教員と校長は一蓮托生だから協力せざるを得ない。職員室のバラバラな雰囲気も変わると思います。

校長に大きな権限はありますが同時に保護者に対して責任ももたなくてはなりません。教育に失敗すれば児童はほとんど転校してしまいます。で、最終的にまづいことが起きたり、教育目標が達成できない時はたぶん、学校理事会のようなPTAプラスアルファのような機関が校長を交代させる。校長は公募制でいいと思います。校長の間にも教員の間にも競争が働きます。よりよい条件で校長に雇われたいとか実績を重ねて校長になるうとか。一律に何年勤めたからいくらの給料ではなく、自分の能力を評価されていくことになる。

——それでは公務員ではなくなる?

最低限の保障はあつていいと思います。普通のビジネスマンではありませんし、すぐに他の職業に転職できるものでもありません。少し自分の教育力が落ちたなど自他共に感じたら大学に一年間研修にいったり、家庭が忙しくなったらパートタイムで働いて時期をみてまたフルタイムに戻るとか。勤務形態も校長が決めればいい。教委が一次的に教員を採用するのと違って学校数だけ校長がいるわけですから、履歴書をもって面接を受ければいい。実績をあげれば待遇もよくなっていく。中学校も大体同じロジックでいいと思います。



はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大学工学部助教授を経て95年より同教授。著書に「言語ゲームと社会学理論」「橋爪大三郎の社会学講義」など多数。

写真：房木芳雄

奨学金で変わる大学

—制度が変われば人間も変わる—

東京工業大学教授

橋爪大三郎氏 に聞く①

トップインタビュー

潮流

題字：奥野誠亮

小学校の学区制廃止など学校の機能を回復するための処方箋を提案する橋爪大三郎・東京工業大学教授。高校教育から大学教育についてもユニークな改革案を展開する。

「高検」創設で高校入試廃止

——高校教育はどこを変えればいいのか。中学校までは学校差よりも個人差のほうが大きいのですが、高校は偏差値輪切りの中に組み込まれてしまつて個人差よりも学校差のほうが大きくなってしまつて。高校のカリキュラムがこなせない低位の学校ではまじめに出席して高卒の資格をとる生徒もいるけれども実力は何もついていない。中位校というのも膨大なモラルの欠如というか、「どうせ私たちの先は見えている」とファッションなど個人の趣味の世界に入つてしまひ勉強する意義を自覚できない。上位校は少しでもいい大学に入ろうと勉強しているが高校のカリキュラムとは関係なく受験技術を磨くだけ。しかも大学に入つたら何をするか分からなくなつてしまふ。高校はこんなふうに分断垂んでしまつていふのです。

これを建てなおすためには、高校入試をなくして学校間格差を縮める。事実上、全入状態なわけですから競争試験をする理由がない。高卒の資格があるならこれくらいの学力は期待できるという社会的機能を確保しないと履歴書に書いても意味がない。

——高卒の資格を得られる学力をどう計りますか？

「高等学校学力検定試験」(高検)を行います。たとえば、英語、日本語、数学、物理、化学・生物など、高校一年生に習うくらいの基本的な内容で将来にわたり忘れては困ることを出題すればいい。優秀な生徒であれば入学してすぐとれてしまふ。あとは難しい勉強をすればいい。低位の高校の生徒は三年間本当にしっかり教わる。学歴には何月何日高検合格と書けばいいので、出身高校



変ですね。つぶれるかもしれない。でも、つぶれたほうがいいですね。その敷地や建物は他に転用するのではなく、評判がよく学生が殺到している大学がそれを買い取る。教員も入れ替えて新しいマネジメントシステムで看板を掛け替えたい。実に合理的です。

本当は大学全部を私立にしたほうがいいと思います。私立になると大学の公的性格を維持するのは両立できません。学費は上がるが、成績が上位の人は何の心配もない。成績が低位ではお金だけかかってしかもいいところに就職できないかもしれない。じゃあ、高卒でみっちり働いたほうがいいかと。これも選択ですからね。わざわざ大学に行く必要もなくなりますね。

——高検には実質的な意味をもたせるわけですね。そうす。給与の俸給表に反映するとか、一次試験を免除にするとか。高検を世のなかで重視していったほうがいい。高検の中身は世のなかの要求ですね。産業界が必要とする労働力がベースになります。基礎的なことに絞りこんでいけばいい。競争試験ではありませんからコアのコアに絞りこんでいくのはさほど難しくありません。決めるのは公的第三者機関。文部省であってもいいし、そうでなくてもいい。高検以外にも大学進学適性テストとか

相当慎重にその人を決めますよね。ということは大学で上位1%で奨学金をもらったということは立派な人材で上位5%はかなりの人材ということですね。

受験生の立場で考えると、例えば一流大学と無名大学両方から合格通知がきて一流大学のほうは「あなたの成績はこれくらいです。過去の例からいってがんばっても三番目の奨学金とまりでしょう」と、無名大学のほうは「すくなくても一番いいランクの奨学金をあげましょう」と講師がついていたとします。確かに一流大学のほうが世間では通りがいいが、無名大学に行けば月々二十万円の奨学金がもらえる。

しかも一番上のランクの奨学金ですから社会的評価も高いとなれば、そちらに行く人も多いのではないでしょう。人材が分散してどの大学にも非常に一生懸命勉強する人は必ずいる状態が生まれるし、勉強しない人は卒業できない。

大学生には二つのタイプがいる。一つは奨学金はどうでもよく、老後の蓄えはあつてここで人生をもう一度見詰め直したい、こういうことを学びたいと人生の喜びとして大学に来る五十〜七十代の人。この人たちには奨学金はいらないし、そのおかげで大学の経営が安定して若い人たちがこられるわけです。もう一つは能力があつてもお金がない若い人。ないなら貸してあげる。本当に世の中の役に立って収入も得たら返してもらおう。本人にはそれだけの能力がいたのでありますから。

大学定員も廃止

——入試をなくすと学生数にアンバランスが生じますね。

今の大学は学生定員があるおかげで、偏差値の一番下の大学まで順番にまんべんなく学生がまわってくる。そのサービスにかかわらず月謝は同じですね。それで、学生定員もなくなります。定員がなくなると低位の大学は大

名は必要ない。そうすれば現在のように高校にはこだわらなくなると思うんです。

奨学金を大学入試に変わる尺度に

——大学教育もおかしくなっていますね。

大学教育は成立していません。以前、卒業間際の学生にレベルに達していないと単位を出さなかつた教授が問題にされましたが、とんでもないのは世の中のほう。入学すれば順調に単位が集まって卒業できるだろうと、社会も親も学生も教師自身も思っている。学生も余裕をみて単位をとっていますから、予定調和的にすんなり卒業できてしまう。勉強せず卒業しているんです。大学の存在理由はないのですが、何とかなっている理由は、入学試験の時に十分に勉強しているその学力を失わないように保ってあげればいから。大学は空洞化しているのです。

大学での勉強の善し悪しよりも受験プロセスの方を企業は信用している。で、このシステムが続く限り空洞化はなくなるから、まず、大学入試をなくすと同時に個人の資質を図る尺度をきちんと用意する必要があります。大学入試に代わり社会に通用する尺度。これは私は奨学金だろうと思います。これも大学の成績なんです。大学がきちんと成績をつけるためには水増しできない尺度が必要なんです。成績の「優」は乱発できる。ところが水増しできないのはお金です。

そこで、奨学金を大学ごとにこしらえて、上位1%の人には月二十万円あげて、学費は免除。上位5%の人は学費免除。上位20%の人は学費は返済するが割割かおまけ。真ん中の人は利子はなしで返済、いちばん低位の人は市中金利並みの金利できちんと返してもらいますよと。そうするとだれでも勉強して成績をよくしてローンは安くしようと思うでしょ。競争の結果、本当に専門の適性がある人が一番いい奨学金をもらえますし大学でも

いろいろな資格試験があつてもいいですね。プロセスでなく結果の管理が大切なのです。

——各自が自立していないと成り立たないシステムですね。

それが目的といえは目的ですね。こんなに自立しないで画一的になったのは最近のことです。例えば、戦前の旧制中学校はとも単位認定が厳しかった。ストリートに五年生になるのは半分以下という実力社会だった。でもみんな文句はいわなかった。

でも、戦後、義務教育になったとたん落第、留年は影をひそめてしまった。私立学校にはありますが、それは懲罰的なもので単位認定をきちんとするというのが趣旨とは違っています。平等主義全盛によつて教育システムが変わつてしまひ、それが日本の教育だとみんな思つてしまひました。業績主義とか絶対評価主義というのは日本になじまないわけではない。

学校の目的は学力伸長

——学校への期待も大きすぎると思いますが。

学校は学力を伸ばすことが目的です。人間のモラルや価値観の形成に配慮はできるけれどもそれを完全につくりあげることができない。学区制をなくし家庭が学校を選択できるのは家庭の価値観を学校が尊重することでしょう。だから家庭の側に権限があるわけで責任も生まれてくる。——でも、家庭の教育力が低下していることから、家庭に任せることを不安に思う教師もいますが。その悪循環をどこかで断ち切る。制度が変われば人間も変わるといことを信じないと。

——改革するとすればまず何から？

奨学金制度かもしれませんね。小学校の学区制も。全部が連動すれば一番いいのですが。実現可能性は皆さんの反応一つにかかっています。